

令和4年度 第3回 中部森林管理局 国有林材供給調整検討委員会  
( 概 要 )

1 開催日時

令和4年12月14日(水) 13時30分～16時00分

2 開催場所

中部森林管理局 大会議室(対面 web 併用方式による)

3 検討内容

- (1) 国有林材供給調整対策について
- (2) 情報交換等
- (3) その他

4 検討結果

令和4年11月の政府の月例経済報告では、我が国の景気は緩やかに持ち直しつつあるものの、世界的な金融引締め等が続く中、海外景気の下振れが我が国の景気を下押しするリスクになっているとされている。

こうした中、管内の原木価格を見ると、一部用途向けで高値であった樹種も下落傾向に転じ、不安定な国際情勢等も相まって、原木価格全体が軟化傾向にある状況が続いている。

一方、国産材需要は大きな秋需とはならなかったものの概ね堅調さを維持しており、引き続き地域の木材需要動向に注視しながら、国有林材の安定的な供給に取り組むことが重要である。

このため、現時点で直ちに国有林材の供給調整を行う必要は無いが、本年度計画された製品生産事業の着実な実行を図り、市場や需要者等に対し国有林材の安定的な供給に努めていくべきである。

5 委員意見等

○カラマツについて、合板関係では製品価格が値下がりしていないので、丸太価格についてさほどの下落では無い。合板の需要が少なく、製品在庫を多く抱える中で需要が落ち込み、合板工場も3割ほど生産を抑えるような動きもある。工場側でも丸太在庫が大量であり受入制限をしている状況。価格面だけでなく、流通面からも非常に厳しい状況。山にも最終土場にも在庫を抱えており、4月以降も先行きが不安である。

○木材統計などを見ると、合板関係は10月時点で消費量が前年同期比91.6%、在庫量が205%、製品生産量が80%となっている。11月・12月はさらに一段落ちてきている状況。スギ中丸太の単価は10月時点で見るとほぼ変わらないが、合板適材のスギ単価については、114%と上がっている。ヒノキの合板関係原木は単価的には前年比116%となっているが、柱適材の原木については70%ほどと下落している。単価だけでなく各地域での物流関係の分析が必要。

○木曽地方の状況として、ヒノキの生産量が全体的に少なかったこともあり、想定していたよりもヒノキ原木の値下がりには少なかった。山からの原木供給については、カラマツは順調、ヒノキ等は減少傾向となっている。また、4月～11月の生産量全体については例年より20%程度落ち込んでいる。

原木消費量については自社で見ると、生産量・販売価格ともにほぼ横ばいで推移していたが、製品市場の価格が70%程度になっており販売量が減ってしまった。製品在庫量については、中堅ビルダー向けはそこまで増えていないが、市場向けの在庫は問屋筋の動きが悪く、20%以上は増えていると感じている。

物価高や円安によって住宅需要は落ち込んでいる。東京湾には輸入材が20万m<sup>3</sup>以上滞留しているという話も聞くが、これも年度内にはある程度減ってきて、需給バランスが取れ始め、原木価格が戻ってくるのではないかと感じている。

○外材は在庫が10万m<sup>3</sup>を超えており、外材の売上げは70～75%程と下がっているなか、国産材の売上げは95%程であり、外材のシェアを食っている状態。自社では4月から11月の売上げ・材積共に対前年比で85%であり、単価は変わっていない。

プレカットは一般住宅の方は減ってきているが、非住宅での需要は思ったよりある。

○富山県の状況として、去年の生産量が15万1千m<sup>3</sup>と50年ぶりに15万m<sup>3</sup>を超える数字を出した。ウッドショックの影響で今のところ好調が続いているが、今後はどうなるかは全く予想ができない。担い手不足など、これ以上出材を増やせるのかという課題がある。

○長野県の状況として、春先はウッドショックの関係もあり、生産量を前年に比べて1割から3割増産したいという声が多かったが、実際は年度が進む中で、合板関係の状況変化もあり、徐々に生産量が落ちてきている。

○愛知県では公共工事で大型ダムの建設事業があり、その支障木もあって去年の生産量は約20万m<sup>3</sup>だった。一方、その内訳として林業伐採と思えるものは、対前年比で減っており10万m<sup>3</sup>を切った状況。その要因としては、他県と同様に担い手があまり増えない、若返りは少しずつ進んでいるものの、総数が増えないという事が考えられる。